

原子炉実験所だより

目次

1. 平成9年度共同利用研究（追加申請）の提出期限について	1
2. 平成9年度臨界集合体実験装置共同利用研究の審査結果について	1
3. 平成9年度の一般公開について	2
4. 原子炉実験所に係る外部評価の結果について	2
5. 着任のご挨拶（三澤 毅）	3
6. 外国人研究者講演会報告	5
7. 原子炉実験所の平成8年度出版物について	6
8. 教官の募集について	8
9. 原子炉実験所運営委員会委員名簿	10
10. 原子炉実験所各種委員会委員名簿	11
11. 受託研究員の受入れについて	14
12. 外国人共同研究者の受入れについて	14
13. 日本学術振興会特別研究員の受入れについて	15
14. 原子力学会日米夏期交換留学生の受入れについて	15
15. 職員の異動	16
16. 委員会メモ（平成9年2月～平成9年4月）	19
別表1 平成9年度臨界集合体実験装置共同利用研究採択一覧	20
編集後記	22

1. 平成9年度共同利用研究（追加申請） の提出期限について

平成9年度の共同利用研究は、すでに公募採択済ですが、特に希望のある場合は下半期だけの「通常採択」について追加申請を受付けております。申請書類の提出期限及び送付先は次のとおりとなっておりますので、十分ご留意願います。

提出期限：イ）共同利用研究

平成9年6月6日（金）

ロ）臨界集合体実験装置（附設中性子発生装置を含む。）

共同利用研究

平成9年7月25日（金）

送付先：郵便番号 590-04

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

共同利用掛

（封筒の表に「申請書在中」と朱記して下さい。）

なお、郵送の場合は必ず「書留便」にして下さい。）

2. 平成9年度臨界集合体実験装置共同利用研究 の審査結果について

2月14日開催の臨界集合体実験装置共同利用研究委員会において、申請のあった10件について審査した結果、9件を採択した。なお、1件については、当該研究の実施に当たり使用予定のCA附設の加速器が不調のため共同利用研究として不採択としたが、当該機器の調整及び性能試験のため所外協力とした。

（採択一覧は巻末の別表1（P. 20、P. 21）を参照）



3. 平成9年度の一般公開について

平成9年度の一般公開を去る4月5日(土)午後1時から4時まで実施した。2年ぶりの公開であった。大阪府下の公共施設400ヶ所余りに案内ポスターを送付し、また熊取町内に40枚をこえるポスターを掲示し、行事の周知に努めた。しかし、今年は選抜高校野球の決勝戦が始業式の翌日にずれこむほど悪天候が続き、当日も大雨をとまなうあいにくの天気となった。所内の桜は満開で見頃であった

が、来訪者は一昨年を大幅に下回り、38名であった。前回と同様、臨界集合体棟、研究炉炉室、ホットラボ施設、廃棄物処理棟を公開した。今回は午前10時から午後4時まで事務棟会議室において実験所の紹介ビデオにくわえて、「向井千秋の宇宙教室」などの科学教育ビデオを上映した。設営、受付、案内に当たった所員は約30名であった。

(学術公開委員会)

4. 原子炉実験所に係る外部評価の結果について

所長 前田 豊

平成8年度に受けた外部評価は、平成9年2月24日の第2回外部評価委員会において委員会の審議を終え、その結果が外部評価報告書として所長に報告された。

その概要は次のとおりである。

原子炉実験所は、全国共同利用研究所として、また、COE機関としての二面性を有しているとの前提で、

1. KURで行われている共同利用研究は、量的な面では概ね良好であるが、利用者、利用分野が固定化する傾向から、質的な面では概して新鮮味が少ないものとなってきているため、研究課題の採択方式について、時代に即応した見直しが求められる。
2. 施設設備については、全体としてよく保守管理されているが、共同利用研究の成果を収めるためには、なお一層のハード面の改善が必要である。

3. 教官の選考については、公募制を採用していることについては評価するが、人事の流動性についてはなお一層の改善が必要である。

4. 教育については、学部・大学院教育への積極的な参加、特にKUCAを用いた他大学をも対象とする学生・大学院生に対する教育は大いに評価できる。

5. 研究活動については、実験所が重点的に進めている特徴的研究の5つの分野については、概ね良好に進捗している。

一方、一般的な研究は、研究成果の質的側面と公表の仕方において今後一層の努力と改善が必要である。

6. 国際学会での活動と研究助成金の受入れについては、なお一層の努力を傾ける必要がある。

次に、外国人委員(3名)は、各人専門分

野の評価ではあったが、全員から実験所は国際的に高い評価を受けているとの評価を得た。

この他、評価に併せて各委員より、実験所に対する多くの提言・批判をお寄せいただいた。これらは、実験所の抱える多くの課題の明確化や将来計画作成に当たっての貴重な意見として受けとめたい。

今回初めて外部有識者による評価を受けたわけであるが、良好な評価を得たものについては今後更にこれを発展させるとともに、指摘や批判を受けた点は今後改善に努めたいので、皆さんのご協力をお願いしたい。

なお、平成9年度においては、主として組織運営、予算、社会との連携について外部評価を受けることとなっている。

5. 着任のご挨拶

三澤 毅

4月1日付けで着任しました。所属は核エネルギー基礎研究部門の核変換システムです。生まれは長野県松本市で、京都大学工学部原子核工学科を卒業後、同大学大学院原子核工学専攻に進み、下宿を京都から熊取に移してほとんどの時間をこの原子炉実験所で過ごしていました。大学院修了後、名古屋大学工学部原子核工学科の助手として採用され名古屋で生活し、今回再びこの実験所にお世話になることになりました。

大学院生として初めて熊取を訪れた頃は、阪和線の快速がまだ1時間に2本しかなく、またその年の4月によりやく大きなスーパーが「熊取は今刺激的」という今聞くとちょっと恥ずかしくなるような謳い文句でオープンした時期で、京都での学生生活が恋しく思えました。現在では、関西国際空港が開港されたこともあり、熊取は交通の便が非常に良くなり、しかも周辺には様々なお店が増えて生活しやすくなったのではないかと期待しております。

研究分野は原子炉物理学で、臨界集合体を

含めた原子炉での炉物理実験とその解析を行なってきました。炉物理実験を行なうためには原子炉実験所の研究炉（KUR）や臨界集合体実験装置（KUCA）、近畿大学原子炉、日本原子力研究所の原子炉などを共同利用として使わせて頂かなくてはならず、実験の度に名古屋を離れて各地へ出かけていました。

名古屋大学には原子炉はもちろん未臨界実験装置も無かったため、研究室でできる実験といえば、1.5m立方の黒鉛パイルに中性子源を入れた設備を用いたもの程度でした。臨界集合体などの原子炉での実験ができる今の時代としては「過去の実験設備」といえるかもしれませんが、それでも5Ci（古い単位ですが）のAm-Beというかなり強い中性子源を用いることで、放射化箔やワイヤーの中性子照射実験や、中性子検出器の特性を調べたり新しい測定装置を開発する実験のために非常に役立っていました。黒鉛パイルとはいえ身近に実験設備があることの有難みは大きかったと思います。また黒鉛パイルは学生実験でも使用しており、金やインジウムの放射化箔

とBF₃検出器を用いた中性子束分布測定実験を行っていました。説明のときに「残念ながら名古屋大学には原子炉は無いけれど、この黒鉛パイルを本物の原子炉と思って原子炉内での中性子束測定方法を学ぶ…」という枕詞を使い、なんとか原子炉実験のイメージだけでも掴んでもらいたいと努力したつもりでしたが、所詮黒鉛パイルから見たこともない原子炉を想像させることには無理があったかもしれせん。

大学の原子核工学関係の学科（最近、学科の名称を変えてしまったところが多いようですが）は、主として原子炉に関係する様々な分野の研究を行うために設立された学科であったと思いますが、現在では原子炉に限らず核融合、放射線利用、材料物性などの非常に幅広い分野での研究が行われており、学科の中で原子炉自体に係わる研究の割合は少なくなってきました。それ自体は当然の成り行きといえるかもしれませんが、最近の動燃での事故の例を挙げるまでもなく、原子力、特に原子炉に関する世間の様々な意味での関心は高くなってきており、それに対する情報を出すべき機関としての役割を原子核関係学科は依

然として持っていると思います（この原子炉実験所も同様ですが）。その1つとして、学生実験のような形で学生が原子炉に接する機会を作ること、原子炉に対する各個人なりの意見を持ってもらうように努めることも重要な役割であると考え、学生実験を行いながら「学生全員に黒鉛パイルでなくて原子炉で中性子束測定を行ってほしい」といつも思っていました。

実験所では主としてKURやKUCAを用いた炉物理実験とその解析に携わる予定です。残念ながらこれまでのような定常的な学生実験の機会はなくなるものの、共同利用や全国大学院生実験などの機会を通じて原子炉実験というものを多くの人に理解してもらえるよう努めるつもりです。自分の研究という面では、今までのように黒鉛パイルを使わなくても身近で炉物理実験ができるようになり、しかも実験を行なうための共同利用の諸手続きが必要無くなるなど良いことづくめのようにですが、「名古屋に住んでいると地元の名古屋城へは行かない」ようにならないよう心しなければならぬと思っています。今後ともよろしくお願い致します。



6. 外国人研究者講演会報告

原子炉利用者グループの主催により、下記のとおり講演会が行われました。

平成9年2月13日開催

“Investigations on the Transuranium Elements in the
Institute of Physical Chemistry, Russian Academy
of Science”

Dr. Nikolai Nikolaevich Krot

(Institute of Physical Chemistry, Russian Academy
of Science)

平成9年4月9日開催

“Recent Developments in UCN Sources, EDM Experiments
and Time Dependent Neutron Optics Studies”

Dr. Robert Golub

(Neutron Scattering Division Hahn-Meitner-Institute,
Berlin, Germany)



7. 原子炉実験所の平成8年度出版物について

原子炉実験所の英文の共同利用研究報告書を中心に編集された『KURRI Progress Report 1995』等の出版物が刊行されております。

内容は下記のとおりです。入手ご希望の方は下記宛ご請求下さい。

〔請求先〕

〒590-04

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

出版委員会

出版委員会

1. 『KURRI Progress Report 1995』 内容目次概略

I. RESEARCH ACTIVITY

1. Slow Neutron Physics and Neutron Scattering
2. Nuclear Physics and Nuclear Chemistry
3. Reactor Physics and Reactor Engineering
4. Material Science and Radiation Effects
5. Geochemistry and Environmental Science
6. Life Science and Medical Science
7. Neutron Capture Therapy
8. Neutron Radiography and Radiation Application
9. Radioactive Waste Management and Health Physics

II. ORGANIZATION

III. RESEARCH DIVISIONS AND LABORATORIES

IV. OPERATION AND DEVELOPMENT OF FACILITIES

V. RADIATION PROTECTION AND MONITORING

VI. PUBLICATIONS (APRIL 1995-MARCH 1996)

VII. MEETINGS, SEMINARS AND VISITING SCIENTISTS

VIII. COMMITTEE MEMBERS

2. テクニカルレポート (KURRI-TR) の内容目次

「短寿命RIによる物性研究」専門研究会(Ⅲ)	1996...KURRI-TR-418
核分裂研究のフロンティア基礎と応用専門研究会報告書	1996...KURRI-TR-419
中性子線残留応力測定に関する専門研究会報告書	1996...KURRI-TR-420
ラドン族の発生・測定・被ばく評価に関する専門研究会報告書	1996...KURRI-TR-421
原子力緊急時と保健物理に関する専門研究会報告書	1996...KURRI-TR-422

3. KURレポート（KURRI-KR）の内容目次

「環境中微量物質の挙動パロメータ検討専門研究会」報告書	1996…KURRI-KR-1
精密制御材料照射装置の開発・設置と応用ワークショップ報告書	1996…KURRI-KR-2
「不安定核の理工学及び核計算法」に関する専門研究会報告書	1996…KURRI-KR-3
粒子加速器を用いるパルス炉専門研究会報告書	1996…KURRI-KR-4
照射線誘起構造変化（Ⅶ）—ミリ波の発生と物性応用	1996…KURRI-KR-5
「天然水中ラドン」専門研究会報告書	1997…KURRI-KR-6
平成8年度「放射性廃棄物管理専門研究会」報告書	1997…KURRI-KR-7
第5回原子炉・放射線技術研修会報告書	1997…KURRI-KR-8
「極端条件下における中性子回折・散乱」ワークショップ報告書	1997…KURRI-KR-9
京都大学原子炉実験所平成8年度「将来計画」短期研究会報告書	1997…KURRI-KR-10
「放射線および原子核をプローブとした物性研究」専門研究会報告（Ⅰ）（平成8年度）	1997…KURRI-KR-11
平成8年度「アクチニド元素の化学と工学」専門研究会報告書	1997…KURRI-KR-12

4. 京都大学原子炉実験所「外部評価報告書」

I 報告書の発刊にあたって

1. 外部評価委員名簿
2. 評価日程と評価委員会要録
3. 評価のための資料一覧

II 国内委員による評価

1. 総合的評価
 - (1)全国共同利用研究所として
 - (2)研究体制について
 - (3)教育等の活動について
2. 研究活動についての評価
 - (1)一般研究活動について
 - (2)特徴的研究活動について
 - (3)国際学会での活動について
 - (4)研究助成金交付状況について
3. 評価表集約
4. 外部評価委員（国内）からの提言

III 外国人委員による評価

IV まとめ

8. 教官の募集について

原子炉実験所では下記のとおり、教官の募集を行っております。詳しくは原子炉実験所総務課庶務掛気付人事選考委員会（TEL. 0724-51-2310）まで照会下さい。

なお、募集締切りは助手：平成9年6月20日（金）、教授・助教授：平成9年8月15日（金）午後5時（必着）となっております。

記

京都大学原子炉実験所は、原子炉による実験及びこれに関連する研究を行うことを目的として設置された全国大学等の共同利用研究所です。当原子炉実験所では、研究炉KURの高度な利用を中心とした研究を行うため、平成7年4月より6研究部門（19研究分野・1客員分野）、2研究施設（2研究分野）の構成で、より活力のある研究所として生まれ変わりました。

今回の募集は、新しい研究体制のもとに、助手については、研究の推進に意欲を持ち、共同利用研究を円滑に行うことにも努力を惜しまない人材、教授・助教授については、各研究分野で研究教育に従事するとともに、共同利用研究の遂行にも積極的に貢献する意欲ある人材を募るものです。

募 集 要 項

I. 募集人員等

職名及び人数	研究部門等	職 務 の 内 容	必要とされる資格等
助手1名	核エネルギー基礎研究部門	材料照射効果の基礎研究、特に照射環境が制御できる中性子照射場の開発とそれを用いた研究、並びに関連実験設備の維持管理	博士の学位を有するか、近い将来取得見込みのあること

注：今回募集の助手の任期は10年を超えないものとします。

区分	職名及び人数	研究部門等（研究分野）	職 務 の 内 容	必要とされる資格等
A	教授1名	中性子科学 研究部門	低速中性子ビームの特質を利用した先端的研究、その研究手法・設備の開発と応用及びこれらの指導と教育、並びに関連する実験設備の保守管理	な し
B	助 教 授 1 名	原子炉安全管理 研究部門 （同位体製造 管理）	放射性同位体の製造と利用に関する研究及びその指導と教育、並びに関連実験施設の管理	放射線取扱主任者免状（第1種）を有し、照射設備等を擁する実験施設の管理と利用に関して経験を有すること

区分	職名及び 人数	研究部門等 (研究分野)	職 務 の 内 容	必要とされる資格等
C	助 教 授 1 名	応用原子核科学 研究部門	メスバウアー分光法等の原子核的手法による機能性材料、新素材等の物性研究及びその指導と教育、並びに関連する実験設備の保守管理	な し
D	助 教 授 1 名	放射線生命科学 研究部門	物理的・化学的基礎に立ち原子炉放射線や同位体を利用した生命科学研究及びその指導と教育、並びに関連する実験設備の保守管理	な し

II. 提出書類

1. 本人による直接応募の場合

- (1) 履歴書（市販されている通常規格の用紙を使用のこと。）
- (2) 研究歴及び実務歴の概要並びに研究業績（助手：業績一覧及び論文別刷10編以内。特に重要と思われる論文については各4部添付のこと。教授・助教授：業績一覧及び論文別刷20編以内。特に重要と思われる論文5編については各4部添付のこと。）
- (3) 推薦状（自薦も可）
- (4) 助手：応募理由を記した書類（研究歴や実務歴について照会可能な方複数名について、氏名・連絡先を記載することが望ましい。）
教授・助教授：応募区分と応募理由を記した書類（各区分の職務の内容に関する経験と展望の記述を含む。特に原子炉実験所の施設・設備を利用して行いたい研究の内容と意義、及びその実現性について具体的に述べることを望ましい。また、研究歴や実務歴について照会可能な方複数名について、氏名・連絡先を記載すること。）

2. 第三者による推薦の場合

(1) 推薦状

この場合、被推薦者本人へは人事選考委員会からその旨連絡し、必要書類を提出していただきます。

III. 提出先

郵便番号 590-04 大阪府泉南郡熊取町野田 京都大学原子炉実験所

総務課庶務掛気付人事選考委員会

（「教官応募関係書類」と表記（朱書）し、郵送の場合は書留にすること。）

9. 原子炉実験所運営委員会委員名簿

平成9年4月1日現在
(順序不同)

高エネルギー加速器研究機構	共通研究施設放射線科学センター	センター長	柴田徳思
東京大学	大学院工学系研究科	教授	石樽顯吉
東京工業大学	大学院総合理工学研究科	同	井上晃
新潟大学	理学部	同	橋本哲夫
大阪大学	工学部	同	宮崎慶次
同	理学部	同	鹿取謙二
同	医学部	同	西村恒彦
広島大学	工学部	同	下村義治
九州大学	同	同	工藤和彦
京都大学	化学研究所	同	井上信
同	大学院医学研究科	同	小西淳二
同	大学院工学研究科	同	今西信嗣
同	原子炉実験所	同	西原英晃
同	同	同	宇津呂雄彦
同	同	同	小野公二
同	同	同	川瀬洋一
同	同	同	森山裕丈
同	同	同	岩田豊
同	同	同	神田啓治
同	同	同	工藤藤章
同	同	同	長谷博友
同	同	同	代谷誠治
同	同	同	柴田誠一
同	同	同	赤星光彦
同		事務局長	黒川征

10. 原子炉実験所各種委員会委員名簿

研究計画委員会

平成9年4月1日現在
(順序不同)

委員長 委員	京 都 大 学 高エネルギー加速器研究機構	原子炉実験所 共通研究施設放射線科学センター	教 授 センター長	川 瀬 洋 一
	大 阪 大 学	工 学 部	教 授	柴 田 徳 思
	大 広 島 大 学	同	同	宮 崎 慶 次
	京 都 大 学	化 学 研 究 所	同	下 村 義 治
	同	原子炉実験所	同	井 上 信
	同	同	同	内 海 博 司
	同	同	同	三 島 嘉一郎
	同	同	同	森 山 裕 丈
	同	同	助 教 授	中 込 良 廣
	同	同	同	川 野 眞 治

共同利用研究委員会

平成9年4月1日現在
(順序不同)

委員長 委員	京 都 大 学	原子炉実験所	教 授	宇津呂 雄 彦
	京 東 大 学	原子力研究総合センター	助 教 授	小佐古 敏 荘
	新 潟 大 学	理 学 部	教 授	橋 本 哲 夫
	大 阪 大 学	理 学 部	同	鹿 取 謙 二
	大 広 島 大 学	原爆放射能医学研究所	教 授	鈴 木 文 男
	同	工 学 部	助 教 授	竹 味 弘 勝
	鳴 門 教 育 大 学	教 育 学 部	教 授	跡 部 紘 三
	九 州 大 学	理 学 部	同	阿知波 紀 郎
	近 畿 大 学	原子力研究所	同	大 澤 孝 明
	高エネルギー加速器研究機構	ブースター利用施設	助 教 授	古 坂 道 弘
	日本原子力研究所	国際原子力総合技術センター	センター長	村 尾 良 夫
	京 都 大 学	大学院農学研究科	助 教 授	片 山 幸 士
	同	放射線生物研究センター	同	江 島 洋 介
	同	原子炉実験所	教 授	西 原 英 晃
	同	同	同	義 家 敏 正
	同	同	同	松 山 奉 史
	同	同	同	工 藤 章
	同	同	同	赤 星 光 彦
	同	同	助 教 授	小 林 捷 平
	同	同	同	増 永 慎一郎

臨界集合体実験装置共同利用研究委員会

平成9年4月21日現在
(順序不同)

委員長	京 都 大 学	原子炉実験所	教 授	西 原 英 晃
委 員	北 海 道 大 学	大学院工学研究科	同	成 田 正 邦
	九 州 大 学	工 学 部	同	工 藤 和 彦
	立 教 大 学	原子力研究所	助 教 授	林 脩 平
	日本原子力研究所東海研究所	原子炉工学部	物理研究室長	大 杉 俊 隆
	京 都 大 学	大学院工学研究科	助 教 授	森 島 信 弘
	同	同	教 授	藤 田 薫 顕
	同	同	同	三 島 嘉一郎
	同	同	同	代 谷 誠 治

原子炉医療委員会

平成9年4月1日現在
(順序不同)

委員長	京 都 大 学	原子炉実験所	教 授	小 野 公 二
委 員	同	大学院医学研究科	同	小 西 淳 二
	同	原子炉実験所	同	赤 星 光 彦
	茨城県立医療大学	放射線技術科学科	同	稲 田 哲 雄
	京 都 大 学	大学院医学研究科	同	今 村 貞 夫
	同	胸部疾患研究所	同	高 橋 正 治
	京都府立医科大学	医 学 部	同	上 田 聖
	大 阪 大 学	医 学 部	同	中 村 仁 信
	同	医学部放射線教育研究センター	同	井 上 俊 彦
	京 都 大 学	原子炉実験所	同	藤 田 薫 顕
	同	同	同	齊 藤 眞 弘

原子炉安全委員会

平成9年4月1日現在
(順序不同)

議長	委員	京大	都大	大阪大	学学学	原子炉実験所 工学部 原子力研究所 大学院工学研究科 原子炉実験所	所長	前田	豊
議委	員	大	大	大	学	工	教	竹田	敏一
		近	畿	大	学	学	同	森嶋	彌重
		京	都	大	学	大学院工学研究科	同	木村	逸郎
			同	同	学	原子炉実験所	同	藤田	薫顕
			同	同		同	同	宇津呂	雄彦
			同	同		同	同	岩田	豊
			同	同		同	同	森山	裕丈
			同	同		同	同	神田	啓治
			同	同		同	同	川瀬	洋一
			同	同		同	助教	西牧	研壯
			同	同		同	助手	山崎	敬三
			同	同		同	技術室長	荒木	康丞
			同	同		同	教授	代谷	誠治
			同	同		同	同	三島	嘉一郎
			同	同		同	同	齊藤	眞弘

保健物理委員会

平成9年4月1日現在
(順序不同)

議長	委員	京大	都大	大阪大	学学学	原子炉実験所 先端科学研究所 薬学部 原子炉実験所	所長	前田	豊
議委	員	大	大	大	学	工	助教	庄野	吉彦
		京	都	大	学	学	教授	佐治	英郎
			同	同	学	原子炉実験所	同	川瀬	洋一
			同	同		同	同	森山	裕丈
			同	同		同	助教	西牧	研壯
			同	同		同	同	秋吉	恒和
			同	同		同	助手	山崎	敬三
			同	同		同	教授	齊藤	眞弘
			同	同		同	同	神田	啓治
			同	同		同	同	三島	嘉一郎
			同	同		同	同	代谷	誠治
			同	同		保健管理センター	所長	森下	玲児

11. 受託研究員の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官	備 考
大 山 かおる (通産省工業技術院名古屋 工業技術研究所 主任研究官)	無機多孔体を反応場とする 電子移動の制御に関する研究	平成9. 4. 1 ～10. 3. 31	放射線生命科学研究部門 教授 長谷 博友	
久保田 信 雄 (ポーラ化成工業(株)医薬品 研究所 研究員)	放射線生物学実験技術	平成9. 5. 6 ～9. 11. 5	原子炉医療基礎研究施設 教授 小野 公二	
福 井 寿 樹 (石川島播磨重工業(株)原子力 事業部 研究員)	乾式プロセスの研究	平成9. 6. 1 ～10. 3. 31	バックエンド工学 研究部門 教授 森山 裕丈	

12. 外国人共同研究者の受入れについて

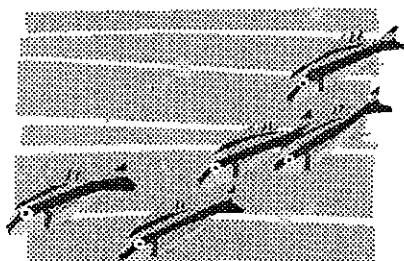
氏 名	研 究 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官	備 考
V. K. Ignatovich (ロシア国 ドブナ合同原子 核研究所 主任研究員)	高性能超冷中性子検出器の特 性試験と解析	平成9. 6. 23 ～9. 7. 7	中性子科学研究部 門 教授 宇津呂雄彦	
A.V. Strelkov (ロシア国 ドブナ合同原子 核研究所 主任研究員)	超冷中性子検出器の高性能化 とその応用に関する研究	平成9. 6. 23 ～9. 7. 7	中性子科学研究部 門 教授 宇津呂雄彦	
Shao Chunlin (中国 中国科学院プラズマ 物理学研究所 助教授)	中性子線の生体高分子への効 果	平成9. 6. 1 ～9. 11. 30	原子炉安全管理研 究部門 教授 齊藤 眞弘	

13. 日本学術振興会特別研究員の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受入期間	受 入 期 間	備 考
日 野 正 裕 (日本学術振興会 特別研究員)	中性子スピネコー法による スピン干渉トンネル時間	平成9. 4. 1 ～12. 3. 31	中性子科学研究部 門 教授 宇津呂雄彦	

14. 原子力学会日米夏期交換留学生の受入れについて

氏 名	所 属	受入期間	受 入 教 官	備 考
Timothy P. Eagan	ケース・ウェスタン ・リバース大学	平成9. 6. 2 ～9. 8. 15	原子炉安全管理研 究部門 教授 神田 啓治	
Vinh Van Ngo	カリフォルニア大学	平成9. 6. 2 ～9. 8. 1 (予定)	放射線生命科学研 究部門 教授 長谷 博友	
Ronald F. Grazioso	ニューメキシコ大学	平成9. 6. 10 ～9. 8. 20	原子炉安全管理研 究部門 教授 齊藤 眞弘	



15. 職員の異動

1. 退職

平成9年3月31日付け

原子炉安全管理研究部門

(停年退職)

助 教 授

しも うら かず 邦
下 浦 一

原子炉安全管理研究部門

(停年退職)

助 教 授

つじ もと だし
辻 本 忠

原子炉安全管理研究部門

(停年退職)

助 教 授

こ ばやし みつ え
小 林 慎 江

核エネルギー基礎研究部門

(動力炉・核燃料開発事業団大洗工学センター 主任研究員)

(任期満了)

客員助教授

え もと たかし
江 本 隆

核エネルギー基礎研究部門

(電力中央研究所我孫子研究所 研究主幹)

(任期満了)

客員助教授

ま はら やす のり
馬 原 保 典

事務部長

(定年退職)

事 務 官

き むら あや お
木 村 斐 夫

総務課図書掛長

(定年退職)

事 務 官

なか がわ のぶ こ
中 川 靖 子

経理課用度掛(守衛)

(定年退職)

事 務 官

おく の よし きた
奥 野 義 清

中性子科学研究部門

(任期満了)

非常勤研究員

ひ の まさ 裕
日 野 正 裕

核エネルギー基礎研究部門

(任期満了)

非常勤研究員

お こう かず とし
小 河 一 敏

中性子科学研究部門

(任期満了)

リサーチ・アシスタント

やま ぎき だい
山 崎 大

核エネルギー基礎研究部門

(任期満了)

リサーチ・アシスタント

まえ だ ひさ え
前 田 久 江

応用原子核科学研究部門

(任期満了)

リサーチ・アシスタント

とう よう せい
藤 暢 輔

応用原子核科学研究部門

(任期満了)

リサーチ・アシスタント

くさ かん 基 し
草 川 基 史

原子炉安全管理研究部門 (任期満了)	事務補佐員	加 藤 洋 子
総務課庶務掛 (任期満了)	事務補佐員	富 山 和 子
総務課庶務掛 (任期満了)	事務補佐員	大 川 久美子
平成9年4月30日付け 経理課用度掛 (辞職)	事 務 官	杉 浦 彰 俊
経理課経理掛 (任期満了)	事務補佐員	田 中 江美子

2. 採 用

平成9年4月1日付け 核エネルギー基礎研究部門 (側放射線利用振興協会 国際原子力技術協力センター 副センター長)	客員教授	土 橋 敬一郎
核エネルギー基礎研究部門 (スイス国立パウルシェラー研究所 研究員)	客員助教授	武 田 靖
核エネルギー基礎研究部門	非常勤研究員	小笠原 宣 紀
核エネルギー基礎研究部門	研究支援推進員	大 川 久美子
平成9年4月7日付け 放射線生命科学研究部門	研究支援推進員	山 本 和 彦
平成9年4月10日付け 中性子科学研究部門	非常勤研究員	徐 迅

3. 昇 任

平成9年4月1日付け 核エネルギー基礎研究部門 (名古屋大学工学部助手より)	助 教 授	三 澤 毅
放射線生命科学研究部門 (放射線生命科学研究部門教務職員より)	助 手	櫻 井 良 憲
事務部長 (文学部事務長より)	事 務 官	石 田 和 樹

4. 配置換

平成9年4月1日付け

総務課図書掛長

(人文科学研究所東洋学文献センター事務掛長より)

経理課用度掛長

(医学部附属病院医事課専門職員へ)

経理課用度掛長

(東南アジア研究センター会計掛長より)

総務課庶務掛

(経済研究所庶務掛へ)

総務課庶務掛

(工学部総務課研究協力掛より)

経理課用度掛

(木質科学研究所会計掛へ)

事務官 金 森 孝 之

事務官 北 野 和 男

事務官 三 宅 学

事務官 泉 森 嘉 宏

事務官 松 田 周 一

事務官 田 中 耕 二

5. 転 出

平成9年4月1日付け

原子炉安全管理研究部門

(豊橋技術科学大学工学部教授へ)

経理課電気掛主任

(舞鶴工業高等専門学校会計課施設係主任へ)

助教授 清 水 良 明

技 官 東 山 幸 弘

6. 転 入

平成9年4月1日付け

経理課電気掛主任

(舞鶴工業高等専門学校会計課施設係主任より)

技 官 荒 賀 順 一

16. 委員会メモ

(平成9年2月～平成9年4月)

平成9年

2月13日	研究計画委員会
2月14日	臨界集合体実験装置共同利用研究委員会
2月17日	運営委員会（回議）
2月17日	協議員会（回議）
2月20日	研究計画委員会将来計画小委員会
2月21日	協議員会
2月24日	第2回外部評価委員会
2月28日	原子炉安全委員会
3月13日	研究計画委員会将来計画小委員会
3月19日	研究計画委員会
3月21日	保健物理委員会
3月21日	協議員会
3月28日	原子炉安全委員会
4月18日	運営委員会
4月18日	研究計画委員会
4月21日	原子炉安全委員会
4月25日	協議員会

お知らせ

研究員宿泊所の宿泊料金は、消費税等の改定により平成9年4月1日から1人1泊につき850円から1,000円（使用料金670円、クリーニング料金330円）に改定しておりますのでお知らせします。

【お詫びと訂正】

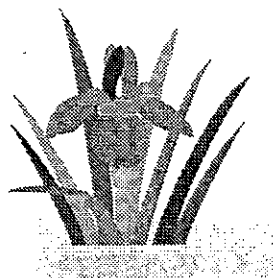
前回（No. 35）の記事（平成8年度原子炉実験所「将来計画」短期研究会報告）の6P右下「外部からの利用者也成果を出」の後の文が1行欠落していました。欠落した部分は「外部からの利用者也成果を出し、かつアピールする必要がある。」のアンダーラインの部分です。ここにお詫びして訂正いたします。

別表 1

平成 9 年度臨界集合体実験装置共同利用採択一覧表

申請者・協力者			実験課題	区分
氏名	所属・職名			
相沢 彦 竹田 敏一 橋本 憲吾 堀口 哲男 山本 淳治 山本 敏久 北本 孝典 杉本 輔 櫛代 豪治 宇根 誠博 林 正俊	武工大・原研 阪大・工 近大・原研 " " 摂南大・工 阪大・工 " " 武工大院・工 " " 原子炉 " " " "	教授 " " 講師 助手 助教 " " 助手 院生 " " 教授 助 " "	原子炉出力振動に関する基礎実験(Ⅲ) —C45G μ H ₂ O 炉心 中性子束分布測定—	共同
橋本 憲吾 竹田 敏一 相沢 乙彦 山本 淳治 山本 敏久 堀口 哲男 北本 孝典 杉本 輔 櫛代 豪治 宇根 誠博 林 正俊	近大・原研 阪大・工 武工大・原研 摂南大・工 阪大・工 近大・原研 阪大・工 武工大院・工 " " 原子炉 " " " "	講師 教授 " " 助教 " " 助手 " " 院生 " " 教授 助 " "	原子炉出力振動に関する基礎実験(Ⅲ) —固有値間隔の測定—	共同
岩崎 智彦 佐波 俊哉 藤原 大資 田部 高志 三浦 孝子 山本 敏久 北田 孝典 代谷 誠治 宇根 誠博 加藤 信始	東北大・工 東北大院・工 " " " " " " 阪大・工 " " 原子炉 " " 京大院・エネ科	助手 院生 " " " " " " 助教 助手 教授 助教 院生	NP237及びAm243の中性子スペクトル 依存捕獲反応率の測定	共同
阪元 重康 湯田 琢磨 山崎 寿昭 工藤 政彦 柿下 純一 代谷 誠治 小林 圭二 小市 原千博	東海大・工 東海大院・工 " " " " " " 原子炉 " " " "	教授 院生 " " " " " " 教授 助 " "	天然ウランを含む体系の中性子スペクトル 測定	共同
工藤 彦一 田中 純一 寺崎 孝隆 宮原 隆雅 北門 俊夫 黒野 勸生 大野 弘 高木 貴弘 ジャニス 小林 圭二 小林 正俊	九大・工 " " 九大院・工 " " " " " " " " " " " " 原子炉 " "	教授 技官 院生 " " " " " " " " " " " " 助 " "	H/U比の小さいトリウム(Th)含有炉 心の臨界実験	共同

申請者・協力者			実 験 課 題	区 分
氏 名	所 属 ・ 職 名			
竹田敏一 相沢乙彦 橋本憲哲 堀口哲治 山本淳 山本敏久 北田典史 阿藤慎治 伊代誠博 宇根博正 林正	阪大・工 武工大・原研 近大・原研 " 摂南大・工 阪大・工 " 阪大院・工 " 原子炉 " " "	教 授 " 講 師 助 手 助教授 " 助 手 院 生 " 教 授 助 手 " "	原子炉出力振動に関する基礎実験（Ⅲ） —C45G 2/3 H ₂ O 炉心 中性子束分布測定—	共 同
北田孝典 竹田敏一 山本久彦 岩崎智彦 広川機 藤原直 代谷大誠 宇根博 加藤文 森千鶴	阪大・工 " " 東北大・工 阪大院・工 東北大院・工 原子炉 " 京大院・エネ科	助 手 教 授 助教授 助 手 院 生 " 教 授 助 手 院 生 教 授 院 生	Am241/U235核分裂比の中性子 スペクトル依存性測定	共 同
谷藤淳 後藤忍 山海賢 早林二 小市圭 市代千 三誠	名大・工 " 名大院・工 " " 原子炉 " " "	教 授 助 手 院 生 " " 助 手 " 教 授 助教授	高分解能位置検出器を用いた炉内中性子束・ γ線強度分布の高精度迅速測定	共 同
山根義宏 井口哲夫 石谷和己 古橋貴一 渡辺一 今井康 早海賢 前田貴 代谷治 三澤誠 宇根博	名大・工 " 名大院・工 " " " " " " 原子炉 " "	助教授 教 授 院 生 " " " " " " 教 授 助教授 助 手	中性子束プロファイルに基づく 未臨界測定	共 同



編集後記

今年の実験所の桜公開は雨に祟られた。桜が満開になると同時に雨に見舞われ、花の命が短くなってしまった。しかし、そのお陰でと言っては若干語弊があるが、実験所には案外鑑賞に堪える遅咲きの桜があることに気がついた。遅咲きの桜は数こそ少ないが、一つ一つの花はより豊かな印象を受けた。勿論、実験所には桜以外にも眼を楽しませてくれる花が沢山ある。

2号炉計画の蕾が萎んで久しい今、将来計画が芽吹こうとしている。かなり遅咲きの将来計画ではあるが、十分に鑑賞に堪える花を咲かさなければならぬ。規模は小さく、数が少なくても見応えのあるものとする必要がある。園芸の通念として、大輪の花を咲かそうとすると、土壌を選んで十分な栄養を与えるとともに、剪定が不可欠だと聞いたことがある。おそらく、今後、将来計画がより具体化するにつれて、土壌に合う花の選定及び剪定作業が行われるものと予想される。この作業に先立って、今、各分野で将来どのような花を咲かそうとしているのかをできるだけ明確に提示することが求められているのではないだろうか？ 勿論、どのような花園にするかということを明確にし、それに必要な施設、器具を整備して、園丁を揃えることが必要なのは言うまでもない。

2号炉計画の轍を踏んではならない。将来計画が結実するか否かは、所外の支持が得られるか否かに左右されるが、偏に所内が一本にまとまるか否かにかかっていると言っても過言ではない。KURをこれからも長い年月にわたって運転し続けるのも困難な情勢となってきた。世界的にも研究炉の数は漸減傾向にある。大学の持つ中小型研究炉の使命は本当に終わったのか、関係者は今一度真剣に考えなければならない。